

学生チューターを支援するためのリフレクションシートの改善

Improved reflection sheets to support student tutors

渡邊 浩之^{*1*2} 鈴木 克明^{*1} 戸田 真志^{*1} 合田 美子^{*1}

Hiroyuki WATANABE · Katsuaki SUZUKI · Masashi TODA · Yoshiko GODA

^{*1}熊本大学大学院教授システム学専攻, ^{*2}九州大学基幹教育院

^{*1}Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University,

^{*2}Faculty of Arts and Science, Kyushu University

〈あらまし〉 学生チューターの質の保証をするためのツールの一つとして、リフレクションシートを有効に活用することを検討した。これは、経験学習サイクルで実践している省察的観察から抽象的概念化に至る場面で使用するためのものである。リフレクションシートは、GIBBS が提案したサイクルに基づき、チュータリングの現場に即したものとした。現場での実践したところ、チューターの記述量が増加するという効果はあったが、課題も見つかった。そこで、勤務報告書にリフレクションの機能を合わせた新シートを作成し実践した。

〈キーワード〉 自己評価, リフレクションシート, 経験学習サイクル, リフレクションサイクル, 学生チューター, チュータリングプログラム

1. はじめに

この研究の主題は、「学生チューターの質の保証をするためのツールの開発と評価」の研究である。ここでは経験学習サイクルを適用したプログラム類を開発、活用している。同サイクルは、KOLB(1984)が提案したもので、具体的経験→省察的観察→抽象的概念化→能動的実験が循環する学習プロセスである。

特に、省察的観察→抽象的概念化におけるリフレクションは、重要な位置を占めている。リフレクションの概念は「省察的実践家」(SCHÖN 1983)から導かれたものともいえる。SCHÖN は実践を行った後にその実践を対象化し、その実践における意味を考えることを、「行為についての省察」といっている。

ただし、単に経験するだけでリフレクションが自然にできようになるとは限らない。たとえば、学期当初に行われるガイダンスで、リフレクションの説明をしても、短時間でその意図をつかめるチューターはほとんどいない。そのため、チューター自身にいきなり、リフレクションを期待してもその効果を得ることは難しい。そうであれば、リフレクションを支援するなんらかの方法が必要となる。

筆者らは、これまで地方の文系私立大学の法学部でチューター育成を実践してきた(渡邊ほか 2014, 渡邊ほか 2019)。通常であれば、実践に入る前に十分なトレーニングを行う。つまり、育成期間にある程度の時間がかかる。しかし、現実には、その時間がとれない状況であった。そこで、実践を行いながら、チューターが成長する仕組みに取り組んだ。

本稿では、学生チューターが、実践を行い、リフレクションをする際にそれをサポートするためのツールとして、リフレクションシートに着目した。これによりチューターのリフレクションの力を高めることが可能であると仮定した。そこで、リフレクションシートを作成、実施し、チューターの成長が可能かどうかを検証した。その方法は、記述内容を前半、中盤、後半で比較して、どのように変化してきたのかを確認する。なお、対象にしたチュータリングの内容は、「学習会(グループチュータリング)」「基礎演習の補助」「課題の添削」である。

2. 先行研究

実践の中でのリフレクションという事例をあげてみると、医療現場やその教育機関(中村ほか 2014, 深田ほか 2015)、また、高等教育においても、プロジェクト学習、サービスマスター型、リフレクションマップの使用、(小山ほか 2017, 今中 2016, 村田 2015)など多様な文脈で使用されていることが分かる。

しかし、リフレクションシートについては、使用機関により異なり、特に標準のものがあるわけではない。そこで、経験学習サイクルの内省部分を発展させた GIBBS のリフレクションサイクルを参考にしたリフレクションシートを作成し、効果測定を行なった。

3. シートの改善とその効果

GIBBS が提案したサイクルは、①説明, ②感情/反応, ③評価, ④分析, ⑤結論, ⑥行動計画

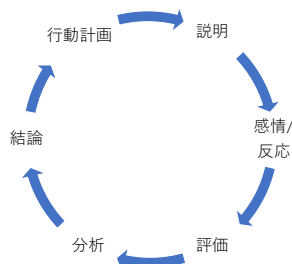


図1 GIBBSのリフレクティブサイクル

の6つのステップで構成される(図1)。

これらをチュータープログラムの文脈に即して作成したのが、次に掲げる質問項目である。

- (1)セッションで起きた具体的な出来事は？
- (2)何が良くて、何が悪かったのですか？
- (3)その状況を分析してください。
- (4)他にどのような行動をとれたのでしょうか？
- (5)次の機会と同様な状況になったらどうしますか？

これを従来から使用している自己評価シート(毎回用)の裏面を利用して、チューターへ記述させた。2016年4月から6月まで28名を対象にしたが、全て記述があったのは、9名のみだった。

評価方法は、この9名のシートの記述内容を前半、中盤、後半に分割し、6つのステップごとに比較した。その結果、前半と比較して後半の記述量が増加したこと、「分析」の記述が、学習者の視点に立ったものに変化したことがわかった。反面、9名以外の者は、「特になし」との記述も目立ち、毎回全ての項目への記述が難しいことも分かった。

そこで、課題解決のために、シートの変更を計画した。まず、チューターの負担を軽減するためにシートを勤務報告書に統合した。内容は、①学習目標を立て、②学習支援の内容として、導入、展開、まとめを記述し、③反省点と改善点として、うまくいったこと、うまくいかなかったこと、うまくいかなかった原因、次にどうすれば良いかという記述へと変更した。

新シートの試行は、2018年4月から7月に行なった。対象者は、4名のチューターである。その結果、チュータリング時におけるタイムマネジメントに関する改善がみられ、実践を行うにつれリフレクションが機能していることが分かった。今後も改善を進めていきたい。

参考文献

- 中村美保子, 東サトエ, 津田紀子(2014) 新人看護師のリフレクションが専門職者としての成長に与える意味についての研究. 南九州看護研究誌, 12(1), 21-32
- 深田あきみ, 新橋澄子, 下高原理恵, 峰和治, 李慧瑛, 緒方重光(2015) 学生のリフレクションを促す経験型実習：主体的に学ぶ力を育成するための取り組み鹿児島大学医学部保健学科紀要, 25(1), 11-18
- 渡邊浩之, 鈴木克明, 戸田真志, 合田美子 (2014) チュータリングガイドラインの開発と形成的評価について (特集 学生による学生への支援を考える(教育(支援)効果・評価のあり方を意識して) リメディアル教育研究, 9(2), 161-172
- 渡邊浩之, 鈴木克明, 戸田真志, 合田美子 (2019) 実践と内省を結びつけるチューター育成プログラムの開発, 教育システム情報学会誌, 36(4), 257-262
- KOLB, D. A. (1984) *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*. Prentice-Hall, Upper Saddle River
- GIBBS, G. (1998) *Learning by Doing, A Guide to Teaching and Learning Methods*. Oxford Polytechnic, Oxford
- SCHÖN, D. A (1983) *The Reflective Practitioner: How professional Think in Action*, Basic Books, New York (ドナルド A. ショーン, 柳沢昌一・三輪健二監訳 (2007) 省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—鳳書房, 東京)
- 小山理子, 松村佳世 (2017) プロジェクト学習におけるリフレクションと学習成果の関連の検討：短期大学のプロジェクト学習におけるリフレクションシートの分析から, 京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要,(55), 253-263
- 今中舞衣子 (2016) サービスラーニングにおけるリフレクションと学習活動デザイン：「弘前×フランス」プロジェクトを事例として, 大阪産業大学論集 人文・社会科学編, 28, 55-74
- 村田恒 (2015) PBLにおけるリフレクションマップの活用, 日本デザイン学会 第62回研究発表大会, セッション ID A9-03, 日本デザイン学会研究発表大会概要集, 62, 48-49